

夜に二人

転箸 笑

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これが僕なりのこいフラです。なんとかこうなりました。  
本当は川のシーンとか入れたかった。

夜  
に  
二  
人

目

次



# 夜に一人

私はベッドから起き上がり、ドアを開けた。蝶番が高い金属音を吐き出して、ほんの少しだけ視界が明るくなる。とつぐに慣れてしまった黴臭い空気を吸い込みながら、階段を上がっていく。

「…あら」

レストランから戻つてくると、階段を覗き込む影があつた。それは今までに全く見た事がない者だつた。私が知らない間に、同棲者が増えていたのかもしれない。

「貴女は、誰かしら？」

「こんにちはー」

「今日はー」

影は質問には答えず、挨拶をしてきた。まあ別に構わない。どうせこれから逢う事は無いだろうし。影は自己紹介をしないまま、会話を始めてきた。

「ねえ、ちよつと教えて欲しいんだけど」「何？」

「この下に、気が触れた吸血鬼がいるつて本当?」  
「本当よ」

私への来客、ということだろうか。だが、その張本人が目の前にいるのに気付かない  
というのは、なんとも滑稽だ。

「その吸血鬼に何の用があつて来たの?」

「こんな黴臭くて暗くて湿氣てる所よりも、素敵な場所があるつて教えに来たの」  
「…ふうん」

私を地下から出してあげようということか。

大きなお世話だ。私は望んでこの黴臭くて暗くて湿氣つている場所に居る。とい  
うより、吸血鬼なのだからこういう所に居る方が居心地がよい。あいつは例外として。  
「多分、吸血鬼は出てこないと思う」

「えー? 何でー?」

「出たくないだろうから」

「そつかあ: 可哀想だなあ」

「可哀想?」

聞き捨てならない言葉だ。いつたい何が可哀想だというのか。

「だつて、ずっと独りぼっちのままだよ!」

「そうね」

「外に行つたら、きつともつと楽しくなれるよ」

「そうかもね」

「でしよう？だから、一緒に行こう？」

「…え？」

「今は真冬だし、もうすぐ陽が傾いてくるよ」

「ちょっと待つて。貴女、いつから？」

まさか、最初からはずつと。

「…何の事かなー？」

にやにや、と笑顔で知らん振りをする女。知っていた上でやつていたのなら、随分と

性質が一もとい性格が悪い。徐に、女はとびつきりの笑顔を浮かべた。

「覚妖怪は意地悪なんだよ？」

「…そう」

窓から空を見上げてみると、確かに夜が近いようだつた。太陽はかなり下に落ちてい  
て、入れ替わるように月が上に登つていた。

別に私が黙つて出て行つても、怒られはしないだろう。驚かれはするだろうが、そんな事はどうでもいい。問題は、どうやつて抜け出すかだ。

「とりあえず、庭に出ましょう」

そう提案した。女は頷いた。

「空気が美味しいわね」

「そりや、あんな埃まみれの所よりはね」

くつくつ、とからかうように笑う女。こいつ、思つていたより性根が悪そうだ。こんなの一緒に出歩かないといけないのを知り、少しだけ気が滅入つてきた。だが、そのネガティブは後回しだ。今は館から出る方法を考えよう。

「門番に出かけてくるよー、って言えばいいじやない」

「それで出れたら苦労しないのよねえ」

美鈴に気づかれず、ついでに上を飛んでいる妖精メイドに見つからないように脱出する。無駄に数が多いだけに、それは困難に思えた。

「吸血鬼ちゃん、あつち見てみて」

「なに?」

女が左の方を指さした。私は言われたとおり顔を向けたが、特に目につくような物は

なかつた。

そして、女が私を抱え上げる。

「…え？」

「全力でいくよ」

女は私を小脇に抱えたまま、猛疾走を始めた。地面が凄い速さで流れしていく。女が地面を踏みしめるごとに、私にも相応の衝撃がきた。

「待つ、て、見つかっちゃう」

「大丈夫なんだって」

余裕綽々で庭を駆け抜ける女。舌でも噛んでしまえばいいのに。私のそんな儂い願いは天に届かなかつたようで、女はどんどん速度を増していく。そして、大ジャンプで堀を越えた。

「星が綺麗だー」

湖を飛んで越えたあと、私達は森に入つた。この中に素敵な何かがあるとは思えなかつたけど。妖怪どころか、梟さえいない。ただ葉と葉がこすれ合う音だけが聴こえた。上を向いてみたが、何も見えない。茂つた木の葉が空を覆い隠していた。

「貴女には星が見えるの？」

「葉っぱが無かつたらねー」

歩いていくうちに、森から出る道が見えた。このまま森中を歩いていても何もなさそ  
うだったので、私達は道に出た。

石畳の道がまっすぐ引かれている。道の端には水溝があり、落ちた葉っぱが積もつて  
いた。

「この道、人里と神社を繋いでるんだよ」

「ふうん」

という事は、道順に歩けば人里にも行けるということだ。

「どつちが人里？」

「あつち」

「じゃあ、そつちに行きましょう」

「あ、違う。こつち神社だ」

「……」

人里があるらしい方向に進んでいくと、確かに明かりが見えてきた。かなり弱弱しい  
光だったが。

「あー、あれはちょっと違うの。人里とはまだ距離あるよ」

「一人きりで人里の外に住んでいるお婆さんがいるのだ、と言つた。あの明かりはそのお婆さんの家だそうだ。」

「寄つてみる？」

「どつちでも」

自然と、件の家に行く流れになつた。

「あんらまあ、小さえ子が夜に何してんの」

お婆さんは想像よりも老けていたが、動きは活発だつた。私達を見つけても、警戒するでもなく自分の家に招き入れた。羽が見えていないこともないだろうに。

「腹減つてねえか？」

「減つたー」

「私も」

たつたあれだけの距離なら歩いても疲れはしないが、やはりお腹は空く。

「待つてな、飯よそつてくつからなあ」

出されたのは、ご飯、みそ汁、何かの菜の漬物、何かの肉の燻製。

「何のお肉かな」

「いのしし」

独り言のつもりだつたのだけど、ぽつりと女が言つた。いのししの肉か。

「こんなもんしかなかつたけど

「全然いいよ！ 頂きまーす！」

「いただきます」

女は嬉しそうに手を合わせ、食べ始めた。女につられて、私も食べ始めた。慣れない箸で漬物を食べてみた。それはケーキみたいに甘くないし、紅茶みたいに香り高くもなかつた。でも。

「…美味しい」

「そらよかつた」

思わず洩らした言葉に、お婆さんが嬉しそうに笑つた。

「もう真っ暗でよ。泊まつていかんのかい」

「うん。私達は大丈夫だから」

「ありがとねー」

お婆さんとお別れして、また石畳の道を歩く。お腹いつぱいになつて、少し気分が落ち着いた気がする。

「ねえねえ、あのお婆さんさ」

歩き始めてすぐ、女が話しかけてきた。

「もうすぐ死ぬ氣がするの。死因は何だと思う？」

そんなことを、あんまり普通の事みたいに言うから、一瞬何を言つてゐるのか解らなかつた。

「老衰かな、それとも病死かな。あそこだつたら妖怪に襲われるのもあるね」

楽しそうに、人の死因を述べる女。私は、自分でも意識しない内に女の横顔を殴つた。殴られた女はきょとんとしていた。どうして自分が殴られたのか、解つてないみたいに。

「少し、黙つてて」

「いいよ」

それから私達は、霧の湖に着くまで何にも喋らなかつた。

「どうだつた？ 外は素敵だつたでしょ？」

「…解らない」

本当に、心からそう思つた。楽しかつたと言えば楽しかつた。でも、逆のことも言え

た。

「さようなら」

「バイバーイ！」

そして、女は居なくなつた。私は女が去つていつた方向をしばらく見つめて、館に帰つた。見つからないように地下室に戻つて、いつもどおり黴臭いベッドに顔を埋めた。

ベッドに横になつていると、時々思い出す。女、お婆さんの死因、漬物の味。あれから、もうずっと外に出ていない。